

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On the accent of "3+2" compound nouns of the Keihan dialect

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中井, 幸比古 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/812

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



京阪方言における「3 + 2」複合名詞の アクセントについて

中井 幸比古

要旨 近畿中央部の方言における、「3 + 2」複合名詞のアクセント（以下「ア」）は、以下のように記述される。先行諸研究の再確認と、核の有無と位置に関する若干の新見からなる。

(a)式。例外もあるが、前部要素の式を引き継ぐ場合が多い。

(b)核。後部要素が決定する。複合語全体を語頭から数えて、3・4・0の3種が原則。そのどれになるかは予測不能な場合が多いが、後部要素の語種・ア・語構成等により、以下の傾向・規則がある。

①後部が外来語。第2拍がンーイのどれかの場合、3・4伯仲（ンは3が、ーイは4が優勢）。第2拍が通常の拍の場合ほぼ4。

②後部が漢語。(ア)後部が漢字1字2拍：3が最も優勢で0がそれに次ぐ。後部H0と単独で使用されない形態素：3・0のいずれかのみ。後部H1とL0：3・0に加えて4も若干ある。(イ)後部が漢字2字2拍：4にほぼ統一され、僅かに見られる3：後部要素が慣用久しい語のごく一部。

③後部が和語（動詞連用形・形容詞関係を除く）。(ア)後部H0和語：3が極めて優勢。稀に0。(イ)後部H1和語：3が優勢だが0もその半数程度。4が併用として若干出現。後部が類別語彙23類でアに差はなく、共に145類に比べて0が多い。(ウ)後部L0和語：3が優勢だが、4が併用として一定量出現。0は少ない。(エ)後部L2和語：3・4伯仲、4のみのものもある。0は少ない。

④後部が動詞連用形。(ア)前部が体言：「オ格でかつ連濁しないもの」は

4が非常に優勢で、少数の0が出現。それ以外は0が優勢で4がそれに次いで多い。(イ)前部が動詞連用形：0が原則。(ア)(イ)とも連濁の場合、連濁以外より0が多い。

(c)特殊拍との関係。3は核が特殊拍に置かれる場合、主に共通語化のために、前にずれて2になることがある。本稿ではこれも3に一括する。

(d)核位置と式の関係。有核の場合、式によって核位置が異なる傾向を有する後部要素もいくらかある。その場合、高起平進式3、低起上昇式4の傾向がある。但し比較的少数で、原則は式に関わらず同じ核位置。

(e)例外的ア。各少数だが以下のアを(も)持つものがある。①2単位に切れるもの(特定後部要素：「～+以下 H1」、並列・対照的な意味「美男+美女 H1+H1」など)。②後部が特定の接尾辞の場合、前部要素のアを引き継ぐ(「～様」など)。③慣用的・語彙的に前部要素内に核を(も)持つもの(京都市方言は H1型のみ)。④は語彙的で、この型で安定する後部要素はない。それとは別に外来語のごく一部に複合語1型がある。

(f)中央式諸方言の中での位置づけ。中央式諸方言間の相違は少ない。僅かに、後部が L0・L2和語の場合に、「3→4 優勢→3 がやや増加」の変化を経た可能性がある。

(g)東京アと京都アの対応。両者の核位置は一致する語が非常に多いが、以下の相違がある。

①後部要素が体言や独立性の低い漢語形態素・接辞の場合。(①ア)後部要素和語の場合、後部京都 H1(東京2多し)は複合名詞「京都4・東京3」がやや目立ち、後部京都 L0・L2(東京1多し)は複合名詞「京都3・東京4」が目立つ。(①イ)東京に複合名詞0がより多い。漢語1字の京都 H1・Xと、和語の京都 H1(特に3類)に目立つ。若干和語京都 H0も。後部要素の類別語彙2・3類の区別残存説は、東京のほうが若干有効か。和田論文のアは一般的京阪アより東京との対応がやや規則的だった可能性がある。

②後部要素が動詞連用形の場合。前部要素が体言で、オ格かつ連濁以外の

場合は、京都は4が非常に優勢だが、東京は3が原則。③後部要素が形容詞語幹の場合、京都0・3、東京0の傾向が強い。

1. はじめに

中井(2002ab及びそれに至る諸研究)で、中央式諸アの記述を行ったが、諸ア間の対応関係・史的変遷の過程に重点を置いたため、特定方言の共時的記述としては不十分な面を多く含んでいた。実証を省略して、規則性・傾向(時に記述不完全な)だけを述べた点もあった。そこで、まずは、調査資料中もっとも整備が進んでいる京都市及びその周辺のアについて、資料に基づく部分体系の記述を進める。近畿中央部内部には若干の地域差もあるが、世代差のほうがはるかに顕著である。本稿では原則として若い世代のアは扱わない。およそ共通語への接近で説明がつくからである。近畿四国周辺地域のアは必要に応じて言及する。近畿中央部のアは、多くの先行諸研究によってその概略が明らかにされているが、記述調査資料に基づく、より包括的・詳細な記述が必要な部分も残されている。

本稿では「3+2」の複合名詞を扱う。これに関する先行諸研究は稿末参考文献を参照。なお、本稿では対象外とするが、「4+2」の複合名詞も、ほぼ同じ傾向・規則で記述できる。複合名詞の核位置は、近畿中央部アと東京アが非常に近いことが知られている(上野善1997)。そのため、すでに東京アで指摘されている事柄は、近畿中央部については指摘がなくても暗黙のうちになり立つと思われる場合も多く、本稿の記述内容には本当の意味の新見が含まれる項目は比較的少ない。

2. 考察対象・考察内容

考察対象。中井(2002b)のフォルダ kyoto の、5後名.txtと5前名.txtの中の8,266項目が対象となるが、このうち、和語・漢語の数字を含むもの(例外的ア多し)、連体修飾のノで結ばれたもの(2単位またはそれに準ずる

もの多し), 連体修飾のガで結ばれたもの(例「天が下(アメガシタ)H1」。前部要素内に核あるもの多し), 用言連体形+体言(例「思う壺」「浮かぬ顔」「若い衆」。2単位またはそれに準ずるもの多し)は除外する。独立度の低い漢語形態素や, 接尾辞は対象とする。地名, 人名+接尾辞などの固有名詞は含む。資料には誤記訂正が必要な箇所がかなりある。

特に言及しない限り, 話者のうち第二次大戦後生を除く, 京都旧市内出身の12名(明治後半から大正初年生中心)と, 京都府中川・滋賀県野洲の2名を含む。中川(言語島的で京都旧市内より古形を残す)は当該複合語Aにも若干の相違があるが, これについては8節で述べる。

「3+2」複合語Aについては, 従来以下の事柄が知られている。

式。式は前部要素のものを引き継ぐ(式保存・式一致。和田1942, 1943)。但し例外もあり, 南北朝時代の体系変化と関わる点がある(上野善1984・中井2002a・上野和2011)。式については, 本稿では特に必要な場合を除き(5節の一部), 言及を省略する。

核。核は後部要素が決定する(和田1943, 上野善1997他諸文献)。後部要素2拍の場合の核の有無及び位置(以下核の有無も含めて「核位置」と呼ぶ)は, -'○○, -○'○, -○○⁻3種である(-は形態素の切れ目, 'は核, ⁻は無核)。5拍語のみを扱うので, 本稿では, 複合語全体の語頭から数えた核位置で示す。-'○○は3, -○'○は4, -○○⁻は0。3は前部要素末尾が特殊拍(ンーイ)の場合, 主に共通語化が原因で核位置が前にずれて2になることがあるが, 以下の記述ではすべて3にまとめる。

核位置が3・4・0のどれになるかは予測不能の場合が多いが, 後部要素の語種・ア・語構成等により, ある程度の傾向性・規則性がある。本稿の主な目的はこれを明らかにすることである。

以下, 後部要素が外来語, 漢語, 和語(右2者を除く)・動詞連用形・形容詞関係の場合に分け, その内部をさらに後部要素のA・語構成などによって細分して核位置について考察を行う。そしてその後, 中央式諸方言の地

域差，東京アとの対照を行う。

なお，語種について，和漢の区別不明の語・日常語化して和語に近づいている漢語は，ほぼ漢語に属させた。

3. 後部要素が外来語の場合

後部要素が外来語の場合の結果を表1に纏める。表の見方は以下のようである。

「○M」は第2拍が特殊拍（ンーイ），「○○」は第2拍が特殊拍以外。「後部ア」は後部要素のア型（H 高起平進式，L 低起上昇式，数字は語頭から数えた核位置，Xは単独ではほとんど使われず，調査項目にないもの）。

「複合語ア」は式を略し，核位置のみを示す。「s」はその型の出現が少ない（当該項目のおよそ1/4以下の項目または話者）ことを示す。例えば「3, 4s」は3が優勢で4が少ない意。但し，1名しか現れない場合は，特に注目すべき場合を除き原則として取り上げない。「3, 4」は両者がほぼ伯仲（どちらが先かはとくに意味がない）。3については核位置が特殊拍（ンーイ）で，主に共通語化によって前にずれて2になっているものも含む。例えば「マシンガン」はH3, L3が多いが，一部L2が見られる。これも3に含む。「切れ」は2単位にアが切れているもの。

「後部数」は，当該後部要素の項目数。例えば，一番上のマス目の，「後部ア

表1 後部外来語○M

後部ア	複合語ア	後部数
H1	3	5
H1	4	6
H1	3, 1	1
H1	3, 1s	2
H1	3, 4	4
H1	3, 4s	6
L0	3	1
X	3	1
X	3, 4	1
X	3, 4s, 1s	2
後部外来語○○		
H1	4	23
H1	3, 4	2
H1	4, 3s	1
H1	切れ	1
H1, L2	4	3
H1, L2s	4	1
L2, H1s	4	1
X	4	2
X	3, 1	1

H1・複合語ア3・後部数5」は、後部要素に「ガン（銃）、バン（自動車）、パン（食物）、パン（調理器具）、ペン（筆記具）」の5語が属する。調査した複合語の数は後部要素によってまちまちで、1語しかないものもあれば、数十語あるものもある。例えばパン（食物）は「カレー～、コッペ～、ロール～」3語、パン（調理器具）は「フライ～」1語。「後部ア H1・複合語ア3, 4s」のカー（車）は「サイド～、ショベル～、選挙～、ダンプ～、ベビー～、ラジオ～、リニア～、レンタ～」8語。

なお、「3+2」複合名詞は後部要素によってアがほぼ決まるとは言うものの、慣用的なものには例外的な型もあり、語数が少ないものは生産的にその型を有するかどうかが不確定な場合もある。細部には種々問題もあろうが、全般的傾向を見るには本稿の処置でよいと考える。

表1のアは以下のようにまとめられる。○Mは、3・4が伯仲。○○は、ほぼ4。例外的に1・「切れ」がごく少数の語に現れる。

例外的なアが1名でも現れる語をすべて列挙する。1（少数話者に現れるものが多い。エイトマン、ガードマン、ヨットマン、エンドレス、コードレス、シームレス、トップレス、チェーンソー [チェーンソー H1もあるらしい]、バースデー、プッシュホン、ヘッドホン、ロングラン）。切れ（視界ゼロ L0+H1, 視力ゼロ H1+H1）。いずれも東京アでも同じ核位置。東京アで5拍1型は「○NON○で語末拍の母音が挿入母音の場合に多い」（Nは促音を含む特殊拍。田中2008）ことが知られるが、上例はこれで説明できない。原語音調の影響や、接尾辞的で前部要素の核を残したものもあると考えられるか。

特殊拍の種類別には、4・3型のみに着目して「3:3, 4併用:4」の後部数を見ると、撥音9:3:1, 長音0:7:1, i (eiを含む) 1:2:1。撥音がもっとも3型が多く、語末音節核回避の傾向が顕著 (cf. 儀利古2011の東京方言も同様、但し0型は本稿話者で皆無)。

4. 後部要素が漢語の場合

後部が漢語の場合を、漢字1字と2字の場合に分けて整理する。

漢字1字の場合を表2に示す。外来語と異なり、2拍目が特殊拍か否かは

表2 後部漢字1字漢語

後部ア	複合語ア	後部数
H0	0	4
H0	3	13
H0	0, 3s	1
H0	3, 0	3
H0	3, 0, 切れ	1
H1	0	15
H1	3	149
H1	0, 3s	3
H1	3, 0	3
H1	3, 0s	13
H1	3, 0s, 1s	1
H1	3, 1s	4
H1	3, 4	3
H1	3, 4s	3
L0	4, 3s	1
L0	0	7
L0	3	14
L0	3, 0	2
L0	3, 0s	3
L0	3, 4	2
L0	3, 4, 0	1
L0	3, 4s	3
X	切れ	1
X	0	18
X	3	102
X	0, 3s	4
X	3, 0	7
X	3, 0s	9
X	3, 0s, 1s	1
X	3, 1s	3
X	前	1
X	3, 前 s	1

アに原則として関わらないので両者を纏めた。漢語は、独立度が低くても単独で全く使えなくはないもの・意味が多少ずれているものが多く、X（単独不使用）の認定基準がやや不明確だが、大枠は問題ないと考える。また、漢語は語数が多いため、後部要素のアが単一の型で安定しているもののみを扱う。

表からわかるように、漢字1字の場合には3が最も優勢で0がそれに次ぐ。後部H0型・Xはこの2つの型のいずれかに

表3 後部漢字2字漢語

H0	3	2
H1	0	1
H1	4	45
H1	3, 4	1
H1	3, 4s	1
H1	4, 0s	1
H1	4, 3s	1
H1	4, 切れ	2
H1	切れ	1
L0	4	8
L0	3, 4	1
L0	4, 3s	1
L2	4	4
L2	4, 3s	1
X	4	3
X	0, 4	1
X	4, 切れ	1

統一されている。3か0のいずれになるかは少なくとも共時的な理由付けはできない。東京と一致するものが多いが、9節で述べるように若干違いがある。

後部 H1・L0に（1字漢語にL2はない）は3・0に加えて4も若干現れる。4が少数でも現れる後部要素をすべて列挙する。片仮名の前の*は連濁するもの。H1：ゾー（増），ダン（段），*シャク（尺 [物差]），ニク（肉），マク（幕），サイ（犀），ゼン（前）。L0：ゼニ（銭），チョー（町），ノー（王 [四天王のみ]），バン（番），*ハン（判），バン（盤）。慣用久しいもの（銭・町・番など）に加えて共通語化が絡むもの（王など）もあるか。4は複合語全体が低起式になるものにやや多いが、漢語は該当語数が少ないので、後述和語についてのみ実証する。

「前」は前部アを引き継ぐもので、クン（君），タチ（達。3も）が属する。

なお、上で扱わなかった、後部要素が複数のア型の場合は、後部要素 H1・L0の両方が現れるものが多く、それらは H1・L0のいずれかで安定しているものと同じ振舞をする。

漢字2字の場合を表3に示す。表からわかるように、後部要素のアと無関係に4が原則。例外的に3のみか3が優勢な3語は「医者 H0・椅子 H0・獅子 H1・下駄 L0」で、いずれも慣用久しいもの。

なお、1字2字を問わず、複合語のアが2単位に（も）切れる漢語後部要素は以下のようなものがある。特定の形態素：タク（宅）H0，チャク（着）H0，H1，ハツ（発）H0，H1，シン（新）L0，イカ（以下）H1，イゴ（後）H1。並列関係にあるものや4字熟語：美男美女，自暴自棄，不老不死，四面楚歌（個人差があるので音調型の提示略）。

5. 後部要素が和語（動詞連用形・形容詞関係を除く）の場合

後部要素が和語の場合につき、後部要素のア別に結果をまとめる。和語も語数が多いので、漢語同様、後部要素が単一のA型で安定しているもののみを扱う。

和語については、語源的には後部要素が1 + 1の複合語であっても、現代人が複合語意識を持つものはほとんどないので、後部要素を複合語とそれ以外で分けることはしない。

後部要素は、意味の違いによってアが明確に分かれる場合は2項目に分割したが、ある程度違いがありそれでも明瞭ではない場合も多く、それらは1項目にまとめた。

類別語彙を後部要素とするものに限っては、中井(2002a) pp.556-559などにも集計結果を示したが、高知・徳島・兵庫県南部の資料も揃っている語彙のみを対象としたので、本稿ではより包括的にこの問題を扱う。

表4に後部要素が和語H0のものを示す。3が極めて優勢で0が少数現れる。0で安定している9個の後部要素を列举する：ガラ(柄), *サマ(様子), シタ(下), ナミ(並み), *ハタ(端), *ハナ(端), ヒザ(膝), スキ(すき(鋤焼))。接尾辞的なものも目立つ。他に4が4個の後部要素のみに現れるが、いずれも3や0とともに少し現れるのみ：*ゴヤ(小屋), *カオ(顔), *ツユ(梅雨), *カネ(金)。「前」(前部要素の核位置保存)は接尾辞的な、人名に付く「さま, さん, ちゃん, はん, どん, どの(殿)」(単独発音はいずれもH0)のみ。「切れ」は「～ヨコ(横)」に併用として現れるのみ。

表4 後部和語 H0

後部ア	複合語ア	後部数
H0	0	8
H0	3	68
H0	0, 3	3
H0	0, 4s	1
H0	0, 切れ	1
H0	3, 0	3
H0	3, 0s	4
H0	3, 4, 0	1
H0	3, 4s	1
H0	3, 4s, 0s	1
H0	H3	1
H0	前	5

表5に後部要素が和語H1の類別語彙のものを示す。和田(1943)に後部要素2類複合語3, 3類複合語0という仮説があるので、金田一(1974), 坂本・秋永・上野和・佐藤・鈴木(1998)によって類別・語例を掲げる。和田仮説は現代語の共時的傾向としてもあまり成り立たず(中井1998, 村中1999など), また少なくとも京阪方言については、南北朝時

表5 後部和語 H1 類別語彙

後部ア	類	複合語ア	後部数	後 部 要 素
H1	1	3	2	*サキ (崎), モチ (麴 (植物))
H1	2	0	4	*カタ (型), カタ (方 [方法]), ムラ (村), ワザ (業)
H1	2	3	7	イシ (石), *カキ (垣), *カタ (渦), カワ (川), *ツカ (塚), ハギ (脛), ヒメ (姫)
H1	2	4	2	*コロ (頃), キタ (北)
H1	2	0, 3s	2	ワザ (技), *カタ (方)
H1	2	0, 4s	1	ヒジ (肘)
H1	2	3, 0	2	*クラ (鞍), *ツマ (褌)
H1	2	3, 0s	5	イワ (岩), *ツマ (妻), *ハタ (機), *ハタ (旗), *ヒト (人)
H1	2	3, 1s	1	*カワ (川 [複合語 H1 はイマデガワ (今出川) 1 語])
H1	2	3, 4	2	*テラ (寺), *カミ (紙)
H1	2	3, 4, 0	1	*フミ (文)
H1	2	3, 4, 0s	1	*セミ (蟬)
H1	2	3, 4s	3	タビ (旅), マチ (町), ユキ (雪)
H1	3	0	13	イロ (色), ウラ (裏), オヤ (親), *キワ (際), *クミ (組), *コト (詞), *コト (事), *タニ (谷), *ハラ (腹), *フシ (節), *へり (縁), マタ (股), ミセ (店)
H1	3	3	21	イケ (池), ウタ (歌), ウマ (午), *カイ (貝), *クサ (草), *クツ (靴), *サカ (坂), *シカ (鹿), *シシ (肉), *シモ (霜), *タイ (鯛), タケ (丈), *ツキ (月), ツチ (土), *トキ (時), ノシ (鬩斗), ハマ (浜), *ホコ (鉾), ユミ (弓), ワク (杵), ワシ (鷺)
H1	3	0, 3s	8	*シマ (島), *シリ (尻), *ハナ (花), モノ (者), モノ (物), モン (者), モン (物), ヤマ (山)
H1	3	0, 3s, 4s	2	*ツラ (面), ムロ (室)
H1	3	3, 0	9	アシ (足), イヌ (犬), ウデ (腕), *クラ (蔵), *コト (言), *シオ (潮), シオ (潮), ヤミ (闇), ワタ (綿)
H1	3	3, 0s	5	アミ (網), イモ (芋), ウマ (馬), *シタ (舌), ナミ (波)
H1	3	3, 1s	2	シマ (島), *トシ (年) [複合語 H1 (も) はシヨードシマ (小豆島)・オナイドシ (同い年) など]
H1	3	3, 4	9	*カミ (髪), *カミ (神), *クリ (栗), シー (椎), *スシ (寿司), *スミ (墨), ナワ (縄), フジ (富士), ユビ (指)
H1	3	3, 4, 0	5	オニ (鬼), *クマ (熊), *スミ (炭), *ホネ (骨), ミミ (耳)
H1	3	3, 4s	6	*サオ (竿), *サオ (棹), *スネ (脛), *ツナ (綱), *ハケ (刷毛), ユビ (指)
H1	3	3, 4s, 0s	2	*クモ (雲), *コケ (苔)
H1	5	0, 3s, 4s	1	*タテ (楯)

代以前の古いアの区別が保存されているとは言えない（上野和2011）ことが明らかである。しかし、現代方言の包括的な記述はこれまでなかったので、ここに改めて扱うことは意味があろう。

表から明らかなように、2・3類とも3が優勢だが、0がその半数よりやや多めに現れる。3類のほうが0の比率が高いとは必ずしも言えない。むしろ、2・3類ともに、145類（H0L0L2）の場合に比べて0が多い、と言える。4は、3または0と併用で現れる場合が多いが、後部H0の場合に比べるとかなり多い。1は特定の慣用久しい複合語に現れるのみ。

表6に後部要素が和語H1かつ類別語彙以外のものを示す。0と4が多いが、たまたま漢字で表記すると2字のものが多いことなどが関係するか。0の後部要素：*クセ（癖）、*シマ（縞）、*ヘタ（下手）、*ヘヤ（部屋）、ナリ（形）。4の後部要素：ウバ（乳母）、ゴミ（塵芥）、タマ（多摩〔地名〕）、ナシ（無し）、ナス（茄子〔ナスビが本来〕）。

表7に後部要素が和語L0のものを示す。表からわかるように、後部和語L0のものは、3が優勢で、0が現れる率は低い（H0型よりはやや多いが、H1型に比べるとかなり低い）。4が、3との併用を含めるとH1型よりさらにやや多い。「切れ」は「キノーキョー

表6 後部和語H1類別語彙以外

後部ア	複合語ア	後部数
H1	0	6
H1	3	3
H1	4	5
H1	3, 0	1
H1	3, 0, 4s	1
H1	3, 4	7
H1	3, 4, 0s	1
H1	3, 4s	4
H1	4, 3s	3

表7 後部和語L0

後部ア	複合語ア	後部数
L0	0	4
L0	3	8
L0	4	1
L0	0, 3, 4	2
L0	0, 3s, 4s	1
L0	0, 4s	1
L0	3, 0	4
L0	3, 0s	4
L0	3, 0s, 4s	1
L0	3, 4	11
L0	3, 4, 0	2
L0	3, 4s	7
L0	3, 4s, 0s	2
L0	4, 3s	1
L0	4, 3s, 0s	1

(昨日 H1 今日 L0), ヒダリスミ (左 L0 隅 L0)」の 2 語のみ。

表 8 に後部要素が和語 L2 のものを示す。後部和語 L2 の特徴は、3 のみのものが全くなく、3, 4 が伯仲している後部要素が圧倒的に多いことである。4 のみも 2 語 (ノコ (鋸), デボ (おでこ, 額)) ある。0 は「ムラ (斑),

ワケ (訳)」の 2 後部要素。「切れ」は「ヒツジサル (未 H0 申 L2)」の 1 語のみ。

本稿では類別語彙のみを取り出して検討することはしないが、和田 1942, 1943) 説では後部 4 類 5 類とも 4 だが、現実には 3 も多く (村中 1999, 中井 2002a), かつ、45 類を比べると 5 類のほうに 4 が多い (中井 2002a)。本稿 9 節も参照。

表 9・10 に後部要素和語 L0・L2 の、話者別・ア型別の出現数・% を示す。

表の上端の行は、京都市内の話者生年 (19xx の xx。-2 は 1898) と滋賀県野洲 (1917)・京都府中川 (1910) の話者を示す。戦後生の 2 名も含めた。

中井 (2002a) その他で何度か指摘したように、3 と 4 を比較すると、4 は低起式の複合語に多く、3 は高起式の複合語に多い。このことを示すためのものである。個人差もあるが、平均% をみると、後部 H3:H4 と L3:L4 が、後部 L0 については 39% : 17% と 15% : 9% (2.3 : 1 と 1.7 : 1), 後部 L2 については 19% : 34% と 6% : 24% (1 : 1.8 と 1 : 4) である。確認できた。

後部要素が和語の場合の、表 4~10 までの結果をまとめると以下になる。①後部 H0 和語 : 3 が極めて優勢。0 は稀。②後部 H1 和語 : 3 が優勢だが 0 もその半数程度現れる。4 が併用として少し現れる。後部が類別語彙 2・3 類で差はなく、ともに 145 類よりは 0 が多い。③後部 L0 和語 : 3 が優勢だが、4 が併用としてかなり現れる。0 は少ない。4 は複合語が高起式

表 8 後部和語 L2

後部ア	複合語ア	後部数
L2	0	2
L2	4	2
L2	0, 4s	1
L2	3, 4	10
L2	3, 4s	2
L2	4, 3, 0s	1
L2	4, 3s	7
L2	切れ	1

表9 後部 L0和語

話者別数	71	57	34	30	14	13	10a	11	10b	09	08	03	0	-2	野洲	中川	合計
H0	14	26	20	20	24	34	50	35	30	11	34	27	36	33	22	38	454
L0	5	9	10	10	10	8	15	8	12	2	11	8	10	11	6	10	145
H3	80	98	55	54	96	57	79	94	114	52	59	78	89	101	35	48	1189
H4	15	33	23	27	36	32	34	40	8	14	42	40	34	28	41	67	514
L3	30	37	22	24	38	25	31	29	43	15	28	44	25	34	11	24	460
L4	7	15	12	14	14	21	19	15	12	4	29	25	20	15	19	26	267
	151	218	142	149	218	177	228	221	219	98	203	222	214	222	134	213	3029

話者別%	71	57	34	30	14	13	10a	11	10b	09	08	03	0	-2	野洲	中川	平均
H0	9	12	14	13	11	19	22	16	14	11	17	12	17	15	16	18	15
L0	3	4	7	7	5	5	7	4	5	2	5	4	5	5	4	5	5
H3	53	45	39	36	44	32	35	43	52	53	29	35	42	45	26	23	39
H4	10	15	16	18	17	18	15	18	4	14	21	18	16	13	31	31	17
L3	20	17	15	16	17	14	14	13	20	15	14	20	12	15	8	11	15
L4	5	7	8	9	6	12	8	7	5	4	14	11	9	7	14	12	9

表10 後部 L2和語

話者別数	71	57	34	30	14	13	10a	11	10b	9	8	3	0	-2	野洲	中川	合計
H0	8	12	10	10	13	12	18	12	12	7	11	12	12	13	10	9	181
L0	7	5	4	4	4	7	8	3	3	4	9	5	3	6	6	8	86
H3	31	9	11	15	31	5	18	15	44	20	8	8	27	32	9	3	286
H4	13	49	37	38	33	39	35	47	11	20	31	28	34	32	22	50	519
L3	16	5	5	5	7	4	9	4	11	7	1	5	5	7	6	2	99
L4	6	24	24	23	23	19	25	26	28	5	30	38	24	28	24	23	370
	81	104	91	95	111	86	113	107	109	63	90	96	105	118	77	95	1541

話者別%	71	57	34	30	14	13	10a	11	10b	9	8	3	0	-2	野洲	中川	平均
H0	10	12	11	11	12	14	16	11	11	11	12	13	11	11	13	9	12
L0	9	5	4	4	4	8	7	3	3	6	10	5	3	5	8	8	6
H3	38	9	12	16	28	6	16	14	40	32	9	8	26	27	12	3	19
H4	16	47	41	40	30	45	31	44	10	32	34	29	32	27	29	53	34
L3	20	5	5	5	6	5	8	4	10	11	1	5	5	6	8	2	6
L4	7	23	26	24	21	22	22	24	26	8	33	40	23	24	31	24	24

より低起式のほうが多い。④後部 L2和語：3・4 伯仲し、4 のみのものもある。0 は少ない。4 は複合語が高起式より低起式のほうが多い。

なお、後部が単独で使用されない和語接尾辞については語ごとにまちまちなので省筆する。

6. 後部要素が動詞連用形の場合

後部が動詞連用形の場合を、以下の分類に従って整理する。前部が体言と動詞連用形の場合に大別する。前者については、体言と動詞の関係がオ格・ガ格・ガオ格以外の様々の関係に3分し、さらに連濁するものとそれ以外に分ける。後者の動詞連用形+動詞連用形については、連濁するものとそれ以外にのみ分ける。

前部が体言の結果を表11に示す。

表からわかるように、「オ格でかつ連濁しないもの」は4が非常に優勢で、少数の0が現れる。それ以外のものは、0が優勢で4がそれに次いで多い。連濁と連濁以外とを比べると、他の条件が同じであれば、連濁する場合に0が多く現れる。なお、連濁は、後部が動詞連用形の場合を除き、「3+2」複合名詞についてはアに関わらないようである。

「オ格でかつ連濁しないもの」で4ではなく、例外的に0で統一されているのは、マチ（待ち。列車～）、ワケ（分け。遺産～）；ウチ（打ち。但し「頭打ち」1語）である。

なお、「行為」を意味するものとは、「～を...すること」で言い換えられるものである。例：手紙書[カ]き、きのご採[ト]り、表替[ガ]え（畳の）、命懸[ガ]け。「行為以外」は、道具（卵切[キ]り・明かり取[ト]り）、行為の結果物（宛名書[ガ]き、ガラス張[バ]り）、やや接辞的なもの（彼岸過ぎ[時期]）など。

ガ格の動詞はすべて無意志の自動詞である（おまけ付[ツ]き、家紋入り）。

表11 前部体言後部動詞連用形

複合語ア	後部数	複合語ア	後部数	複合語ア	後部数
オ格・行為・連濁		ガ格・連濁		ガオ格以外・連濁	
0	7	0	2	0	36
4	1	3, 0s	1	4	2
0, 4s, 3s	1	ガ格連濁以外		0, 3s	1
4, 0	1	0	5	0, 4s	2
オ格・行為・連濁以外		0, 4	1	0, 4s, 3s	1
0	2	0, 4s	2	4, 3s, 0s	1
4	26	4, 0s	1		
3, 4s	1			ガオ格以外・連濁以外	
4, 0s	4			0	35
4, 3s	1			4	3
オ格・行為以外・連濁				0, 3	1
0	13			0, 3s	1
0, 3s	1			0, 3s4s	1
4, 0s	1			0, 4	1
オ格・行為以外・連濁以外				0, 4s	7
0	1			3, 0	2
4	20			3, 4, 0	1
0, 4	2			4, 0	1
0, 4s	3			4, 0s	3
4, 0	1			4, 3s	2
4, 0s	5				
4, 3	2				

3がごく少数の語に散発的に現れる。よく熟した語や接辞的なものの一部「敵討ち [カタキウチ], 暇乞 [ゴ] い; ガラス越 [ゴ] し」に他の型とともに現れるが、それとは別に、ごく一部に共通語の音調として現れることがある（「マッチ売り」L4が本来だがL3などが散発的に）。

有核の場合、3ではなく4でほぼ統一されている理由は不明である。動詞の連用中止のアは、2拍5段・3拍1段の各1類H1（乗り，止め）2拍5段・3拍1段の各2類L2（飲み，食べ）。連用形からの派生名詞はそれぞれH0（乗り，止め）とH1（飲み，食べ。下の世代ではL2なども）である。後部要素が体言の場合の4の現れやすさはL2>L0>H1>H0の順であった。

後部の連用形が連用中止のアと同じなら、L2が現れてもまったく不自然というわけではない。しかし動詞1類と2類とで4の現れに違いがないのも説明不能である。

前部が動詞連用形のものの結果を表12に示す。圧倒的に0が優勢である。特に連濁するものは0に統一されていると言ってもよい。

複合動詞からの派生・複合動詞としても使えるもの（申し込み、譲り受け）や、それ以外の様々の関係のものがあるが、ア上は一括してほぼ問題がない。わずかに、対照的な意味をもつもの（昇りおり、上がり下[オ]り）、慣用的なもの（騙し討ち、思し召し）のごく一部に3が現れることが注目される。

表12 前部後部とも動詞連用形

複合語ア	後部数
連濁	
0	27
0, 3s	1
連濁以外	
0	30
0, 3	1
0, 3s, 4s	2
0, 3s [思し~]	1
0, 4s	1
0, 4s, 3s	1
3, 0 [返り~, 騙し~]	1
3 [昇りおり, 上がりおり]	1

7. 後部要素が形容詞関係の場合

後部要素が形容詞関係のものを表13に示す。ごく少ないが、後部要素が形容詞語幹4項目と「~さ」2項目のみである。形容詞語幹は0と3の両方が現れる。「~さ」は複合形容詞からの派生かと思われるが、0である（下の世代で4が増加）。

表13 後部形容詞関係

	複合語ア
ワル (悪)	0
*ハヤ (早)	0, 3s
*フト (太)	3, 0
ウス (薄)	3, 0
ナサ (無さ)	0
ヨサ (良さ)	0

8. 中央式諸方言の地域差

中央式諸方言の中で、「3 + 2」複合語のアの地域差はわずかである。

中井 (2002a) などでも述べたが、後部和語体言の場合は、(a)複合語が0になるものに方言差はあまりない、(b)後部L0・L2の時の4の出現頻度

に方言差があり、「①高知3ではほぼ統一、②高知以外のやや周辺部の方言4がやや多い、③京都ではそれよりやや4が少ない」。そして、(b)については①→②→③の順に変化が起ったのではないかとした。核位置が逆戻りしているのが不審に思われるかもしれないが、「①形態素の切れ目の前に核を置くのが優位（高知は2+3複合語でも顕著）→②核位置の後退→③昇核現象」で説明がつく。近世京都アにおける①との類似・相違点につき上野和（2011）参照。表9・10から京都府中川が②の段階にあることがわかる。また、京都より古形がいくらか残る大阪市について、村中（1999）によれば②→③的な変化が進みつつあるようである。

後部が和語動詞連用形・形容詞関係・漢語・外来語については、各地点とも京都とほとんど違いがない。本稿では包括的な記述は省略するが、概要を見ておく。後部和語で差異が顕著で3が多かった高知でも、これらは、京都で4が出る場合は、京都よりやや3が多いが、4がやはり優勢。京都以外は調査語数が少ないので断定的なことが言いにくい。

その例として、「後部外来語で第2拍が特殊拍以外」の場合をあげておく。高知アの例：「黒部ダム・料理メモ H4, 苺ジャム・非常ベル・自動ドア L4, しかし「排気ガス L3, 炭酸ガス H4, 観光バス H4, 大型バス L5, L4, チューインガム H4, H5」（語例が少ないので6拍語も含む）。「前部体言・後部和語動詞連用形・オ格・連濁以外」も3が併用で出るものも多いが4が優勢。高知アの例：ガラス切 [キ]り・ガラス拭 [フ]き・醤油差 [サ]し・力持ち, 以上 H3, H4, ズボン吊 [ツ]り・相撲取 [ト]り・めがね拭 [フ]き, 以上 H4。

外来語の'・○○は高知本来の複合語規則を新語にも適用したものかもしれないが、特定形態素の例外的振舞にとどまるものかもしれない。一方、動詞連用形については、話者が昭和20年代初頭生という下の世代なので、共通語化が関係している可能性もある。

9. 東京アクセントとの対応

3 + 2 複合名詞アは、近畿中央部と東京で核位置がかなりよく一致することが従来から指摘されている。しかし、詳細に見ると相違もいくらかあることが判明する。

東京アは、秋永一枝編『新明解日本語ア辞典』（2001）と『NHK 日本語発音ア辞典 新版』（1998）による。本来ならば包括的な文献探索及び調査が必要だが、便宜的に現行のア辞典による。現在のア辞典はやや古めの生え抜き東京人のアが重視されており、本稿で扱う世代の京都ア（明治後半～昭和一桁生）と世代的にほぼ対応する、ということもある。ア辞典に複合語の掲載がない後部要素は対象外とする。本稿の資料と異なる複合語しかない後部要素は、若干の危険もあるが扱う。

a) 後部要素が体言や独立性が低い漢語形態素・接辞の場合。

後部要素が体言や独立性が低い漢語形態素・接辞の場合、京都と東京で核位置が異なる後部要素は190あったが、そのうち京都で複数の型を持つ16を除いた174を扱う。

表14に調査結果を纏める。語種別に京都アを基準として分類した。

有 = 京都無核・東京有核、無 = 京都有核・東京無核。前 = 京都・東京とも有核で京都より東京が核が前（ほぼ京都4・東京3）、後 = 京都・東京とも有核で京都より東京が核が後（ほぼ京都3・東京4）の意である。

例えば、「京都3・東京0」の場合

表14 京都・東京の相違

		有	無	前	後
外来語	○MH1	0	2	0	2
	○ML0	0	1	0	0
	○○H1	0	1	0	1
漢語	1字H0	1	2	0	0
	1字H1	7	20	1	1
	1字L0	1	6	2	1
	1字X	2	27	1	0
	2字H1	0	2	0	1
	2字L0	0	0	1	0
	2字x	1	0	1	0
和語	H0	0	6	0	0
	H1	4	16	19	5
	L0	9	5	4	24
	L2	0	0	0	9
	X	0	4	3	4
合計		26	91	32	48

は「無」, 「京都3, 4s・東京3, 4」の場合は「後」(東京でも片方が優勢の場合もあろうが, 辞典に複数型併記の場合は同じくらい使うと仮に仮定した)。「京都3, 4s・東京3, 4, 0」のような場合は, 「後」「無」の両方で1と数える。したがって表では後部要素数よりも合計数が多くなる。京都の複合語 H1型, 東京の複合語 1型・尾高型のような, 少数の語に散発的にしか現れない型を除いて考察すると, 以下の2点が判明する。

①和語 H1は前(京都4・東京3)が目立ち, 逆に和語 L0・L2は後(京都3・東京4)が目立つ。前者の例をいくつかあげると, 「*テラ(寺), マチ(町), *カミ(紙), *クリ(栗), シー(椎), *スシ(寿司), フジ(富士), ユビ(指)」などだが, いずれも京都で3, 4併用・東京で3。後者の例は「*カサ(笠), *カサ(傘), *キヌ(絹), *シル(汁), *ツエ(杖), ミノ(蓑), クズ(屑), *フネ(船); *クモ(蜘蛛), *コエ(声), アユ(鮎), ヘビ(蛇)」などで, これも京都は3, 4併用が多い。但し, 東京でも下の世代・非生え抜きなどは3も多いのかもしれない(上野1997)。

②全体として, 無(京都有核・東京無核)の例が目立つ。特に漢語1字の H1・X と, 和語の H1 (特に3類語) に多い。漢語の例は「セン(線), ダイ(大), ビン(便), ヘン(編), *ハン(版); ケン(犬), セン(戦), セン(扇), セン(泉), セン(船), *バン(板), ビョー(病)」などである。これらは下の世代の京都では共通語化によって無核になっている場合も多い。和語の該当語を表15に示す。

表15 京都・東京の相違—後部 H1和語で東京に平板が多いもののみ—

		京都	東京
*トキ	時	3	0
*トシ	年	3	0
モノ	者	0, 3s	0
モノ	物	0, 3s	0
モン	者	0, 3s	0
モン	物	0, 3s	0
ヤマ	山	0, 3s	0
ヤミ	闇	3, 0	0
*カミ	髪	3, 4	0, 3
*スミ	墨	3, 4	0, 3
*クサ	草	3	0, 3
*スネ	脛	3, 4s	0
*ツナ	綱	3, 4s	0, 3
ナワ	縄	3, 4	0, 3
キタ	北	4	0
メシ	飯	4, 3s	0, 3

表からわかるように、和語は多くが3類の類別語彙である。和田仮説（5拍複合語で、後部要素2類は3、3類は0）は、東京でもあまり規則的に成り立たないが、京都を含む中央式に比べれば、やや有効性が高いと言える。なお、和田論文は、後部が類別語彙4・5類の場合複合語アを4とするわけであるが、これについては5節で述べたやや古めの中央式ア（②）によっている可能性もある反面、2・3類の場合に準じて、東京アとの規則的対応がやや顕著なアに拠られた可能性（橘1990に寄せられた和田氏序文を参照）もある。

なお、1類でも東京のほうがいくらか0が多い。類別語彙では、*カオ（顔）、*クチ（口）、*コシ（腰）、サキ（先）、*シワ（皺）の5語が該当する。これにも注目すべきであろう。

ともあれ、中央式よりも東京の方に2・3類の区別の痕跡が残っている可能性がある。中央式に比較的近い地域に分布する東京式に、単独でも2・3類の区別の名残を思わせる特徴を持つ地域が散在することを考えれば、内中輪東京式諸方言の複合名詞の精査が必要である。

b) 後部要素が動詞連用形の場合

後部要素が動詞連用形の場合は、一々の調査結果の提示は省略するが、前部が体言で、オ格かつ連濁以外の場合は、京都では4が非常に優勢である一方、東京では3になるのが原則（『新明解日本語アクセント辞典』p.22）。例：「帽子掛け（京都L4、東京3）、空気抜き（京都4、東京3）」。この相違がどのような意味を持つのかは不明確である。0になる条件には顕著な相違がないようである。

c) 後部要素が形容詞関係の場合

後部要素が形容詞語幹の場合、京都0、3、東京0の傾向が強い。例「望み薄、見込み薄」。後部が「～さ」の場合、京都0、東京4。

参考文献

- 上野和昭 (2011) 『平曲譜本による近世京都アクセントの史的研究』 早稲田大学出版部
- 上野善道 (1984) 「類の統合と式保存—隠岐の複合名詞アクセント—」『国語研究』 47
- 上野善道 (1997) 「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」『日本語音声 [2] アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』 三省堂
- 儀利古幹雄 (2011) 「東京方言におけるアクセントの平板化—外来語複合名詞アクセントの記述—」『国立国語研究所論集』 1
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究』 塙書房
- 坂本清恵・秋永一枝・上野和昭・佐藤栄作・鈴木豊 (1998) 『「早稲田語類」「金田一語類」対照資料』 アクセント史資料研究会
- 橘幸男 (1990) 『神戸・和田岬の言葉』 和田神社社務所
- 田中真一 (2008) 『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』 くろしお出版
- 中井幸比古 (1998) 「中央式諸方言における複合名詞のアクセントについて」『神戸外大論叢』 49-3
- 中井幸比古 (2002ab) 『京阪系アクセント辞典』『同データ CD-ROM』 勉誠出版
- 村中淑子 (1999) 「類別語彙 2 拍名詞が後部要素となった場合の複合名詞アクセントについて—和田論文と前田論文を杉藤 CD-ROM で検討する—」『徳島大学国語国文学』 12
- 和田實 (1942) 「近畿アクセントに於ける名詞の複合形態」『音声学協会会報』 71
- 和田實 (1943) 「複合語アクセントの後部成素として見た二音節名詞」『方言研究』 7

